

## 2016 年度研究会報告書

研究課題名：中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

### 第 2 回

日時：2017 年 3 月 3 日（金）、4 日（土） 14:00-18:00（両日とも）

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 301 室

参加者：3 月 3 日 Antranik Dakessian, Ray Mouawad, Souad Slim, 高橋英海、吉村貴之、若松大樹、黒木英充、錦田愛子、近藤洋平（以上、AA 研所員）（ほかにオブザーバー数名）

3 月 4 日 菊地達也、Antranik Dakessian, Ray Mouawad, Souad Slim, 高橋英海、吉村貴之、若松大樹、辻明日香（以上、AA 研共同研究員）、黒木英充、近藤洋平（以上、AA 研所員）（ほかにオブザーバー数名）

研究会概要：前回の研究会で、確認した方針に基づき、各発表者は中東の諸少数派集団の「生き残り戦略」について報告した。1 日目の冒頭で、近藤発表は人間個人や集団の「生き残り戦略」を扱った先行研究を紹介し、そこから諸集団の「生き残り戦略」を考察するための有益な視点・概念を提供した。続いて Guita 発表は、20 世紀後半から現在に至るまでのレバノンのクルド人の生き残り戦略を、自己認識の維持、アラブ人のスンナ派ムスリムとの協調、母語の維持、文化的行事の保存などから説明した。同様に若松発表は、トルコ共和国に暮らすアレヴィーについて、世俗的社会を指向するトルコ共和国政府の下で、主としてトルコ語を話すアレヴィーがどのように自己のアイデンティティを保持して来たかを、聖廟参詣、宗教的集会への参加、そして Cem Foundation による出版・啓蒙書活動から明らかにした。Dakessian 発表は、冒頭の近藤発表を発展させるかたちで、少数派の「生き残り戦略」をどのようにして把握するべきかを論じた。そして建築や刺繍、また銅製品の意匠などからも、日常生活および緊急時における「生き残り戦略」を読み解くことができることを、図像資料を提示して解説した。

二日目は、はじめに今次研究会のゲスト発表者として招いた菊地達也・東京大学准教授が、ドゥルーズ派における生き残り戦略を報告した。同報告では、古典イスラームにおいてドゥルーズ派がどのように位置づけられているのか、20 世紀半ば意向のドゥルーズ派信徒が、自己をどのように規定していたのかについて、詳しい説明がなされた。辻発表は、現代エジプトのコプト教徒が置かれている状況を、先行研究で言及される二項対立的枠組みを利用して説明した。また Slim 発表は、西暦 18 世紀から 19 世紀のレバノンのギリシア正教徒のある裕福な一家が、平時・戦時においてどのような対応を取ったかについて、手稿資料を利用して解明した。そして Mouawad 発表は、18 世紀レバノンのマロン派、ギリシア正教徒、そしてユダヤ教徒の「生き残り戦略」を、都市部における集住形式や外部集団との関係などから説明した。

研究会の最後に、プロジェクトの今後の活動方針などについて議論した。

（近藤洋平）

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----